

社会科学と自然科学

谷 光 太 郎

昨年4月、縁あって山口大学経済学部の祿を食むこととなった。それ以前、私は民間メーカーで勤めていた。直接上司としてお仕えした中に二人の山口大学経済学部のご出身者（一人は高商時代の卒業者）がいた。もちろん山口大学経済学部の高名はよく知っていた。しかし、本学に来て初めて知ったことも多い。本学が東京高商（現一橋大）、神戸高商（現神戸大）に次いで、全国三番目に古い高商であることは知らなかった。本学ご卒業の諸先輩に叱られること必定だが、正直に告白する。このことはもっと社会にPRすべきだ。また、キャンパスの美しさには驚いた。これ程、山紫水明、風光明媚な土地にあることも知らなかった。本学は明治38年の創設より創設90周年にあたる。由緒ある記念号には、自分が今担当している部門に関連する論文を書くのが礼儀ではあると思うが、大学生活に少し慣れ始めた後参者、そこはご容赦願って、この1年間、大学生活に関して感じたことなどを何編か草してみた。諸賢のご笑覧に供したいと思う。

「学問への疑問と手がかり」

昨年夏、講義ノートを作っていた折、頭の疲れ治しくらいの軽い気持ちで読んでいた数冊の本の中で妙に心にとまるものがあった。

一つは、末梢神経を刺激するくらいしか意味のないような論文への疑問と、江戸時代の儒者の弟子指導の一例であった。前者は、村川堅太郎氏、中野好夫氏のエッセイである。

「最近あちらのある碩学の小著を繙くうちに、『近年の小さなテーマにつ

いての顕微鏡的研究の夥しさをみると、人文科学の将来に不安を覚える』という意味の一文に接して、大いに我が意を得た…」村川堅太郎「古典古代遊記」

あちらの碩学とは、同じエッセイ集にある、古典古代史のA・モミリアーノという人らしい。モミリアーノはハーバード大学での講演で、流行の「社会史」の研究が精緻を極めるあまり顕微鏡的分析に陥っている現状に危惧を表明した、と村川氏は同じエッセイ集で書いているから、前述の引用文とは同じ内容のものだと思う¹⁾。

他人と違う論文を書く方法の一つは、誰もあまり注目していないごく限られたきわめて狭い分野を掘り下げるやり方だろう。哲学や思想はそう書けるものではないし、書いたところで大先生方ならともかく、評価されることもなく無視されるのが落ちだろう。狭い分野の新知見なら、それなりの存在価値もある。かくして、微細な分野、微細な視野へと進む。私は見たことはないのだが、シナには工人が親子三代にわたって、百年以上の時間をかけ一本の象牙に微の限りを尽くした彫刻がある、と聞いている。聞いただけで気が滅入る気がするのは私だけだろうか。

「ときには瞠目するほど気鋭な学徒諸君の論文には、ときに私達老骨など愧死したくなるほど精緻な問題探究がある。よくもこう小さな問題を、こうも丹念に詮索したものかなと感歎これを久しうするような論文にさえお目にかかる」中野好夫、「英文学夜ばなし」

中野氏は続けていう。そんな論文を読んだとき、妙に索然たる気持になる。こんな小さな問題を掘り下げて行っていったい日本文学に——そこまで大きくいわぬとしても、研究者自身の魂の糧になるようなことはあるのか。これらの論文は直接根本資料に当たっての考証検討ではない。要するに英米本国の研究の要領よい取捨・総合にすぎぬのではないか。

問題の片隅をほじくる精緻も結構なのだが、たまには多少の腰だめでもいいから、体当たりとでもいうか、研究者自身の魂の要求との間に火花を散

1) 「古典古代遊記」, 村川堅太郎, 岩波書店, 1993年, p.208, p.114

らすような英文学論もあっていいのではないか²⁾

薩摩藩では、藩士の学問を固く禁じていたと聞く。学問をすればする程、末梢的理屈が多くなり、侍としての大本の根が弱くなるのを恐れてのことであった³⁾

その点、幕末時代のことを書いた司馬遼太郎の小説を読むと、薩摩に比べると長州の侍は少し理屈っぽい感じがしないでもない。

私は大学に来る前、民間企業の半導体関連の研究所いたことがある。この研究所の仕事はずばり、微細化技術の研究・開発であった。ミクロン(千分の一ミリ)という単位はもちろん、ナノメートル(百万分の一ミリ)という単位が使用され、分子レベルの加工まで研究される。文字通り、微に入り、細に入る研究だ。ただ、その研究開発には、その開発品がどの方面で、どのシステムでどのように使用されるか、そのために求められるべき性能は何かがよく考えられていた。

心に残ったもう一つは、根本をよく調べて考えよ、と指導した江戸期の儒者山崎闇斎の話である。

遊佐木斎という人が山崎闇斎に初めて学んだ時のことを「思い出」として書いている。(以下、平泉澄、「物語日本史(下)」より抜粋)

木斎は21歳の春、仙台から江戸へ出て初めて闇斎の塾を訪れた、2～3日の後、論語の泰伯の章について、いろいろの説があるがどれが正しいのですかと尋ねた。

「大切な処だ。集注(しっちゅう)を暗記しているか」

「少し覚えています、まだ不十分です」

「大全(たいぜん)を見ると、誰それは朱子の解釈に反対であり、誰それは賛成である。それをいちいち覚えているか」

2) 「英文学夜ばなし」, 中野好夫, 新潮社, 1971年, p.13

3) 「白洲正子自伝」白洲正子, 新潮社, 1994年, p.7～9に興味深いエピソードが書かれている。

「いや覚えていません」

「通鑑（つがん）前編に湖子の論があるが覚えているか」

「覚えていません」

「読書録（とくしょろく）にいくつかの説が載せてある。覚えているか」

「覚えていません」

「それでは話のしようがないではないか。もし本当にこの処を質問しようとするのであれば、これらの書物をよく調べ、いちいちそれを分析して、どこに問題があるか明らかにして、その上でもってこい」

木齊は恐れ入って、広く諸種の書物を調べ、朱子に従う説を集めて一冊とし、朱子に反対するものを集めて同様に一冊とし、くり返してこれを読んで再び闇斎先生に尋ねた。

「よしよし。それでこそ学問になるのだ。ここは極めて大切な処であるから、軽々しく説明するわけにはゆかぬ。自分は先年『拘幽操（こうゆうそう）』一冊を出版させておいたから、それを求めて研究せよ」

木齊は「拘幽操」を求めて、熟読した上で、翌日先生を尋ねて、自分の考えを申し上げたところ、「よく分かったね」といって、ていねいに説明してくれた、というのである⁴⁾

馬を水のある所へ連れて行くことはできるが、飲みたくない馬に水を飲ませることはできない。

教えを受ける者に、学びたい、という思いがなければ、教える者がどんな工夫をし、熱意を持っても、どうしようもない。また、教える者に、それなりの蓄積と見識がなくてはならぬことももちろんだ。

木齊の思い出は、この両者の理想的関係をよく表わしている。

学問が衣食のための手段となり、やむを得ず大学へ入る者が多い（私自身もそうであった）時代、どうすればよいのか、と迷うことが多い。村川、中野の両先生のエッセイ、闇斎先生と木齊の話は、何かの手がかりになる、と思っている。

4) 「物語日本史（下）」平泉 澄，講談社学術文庫，1993年，pp.71～73

「知識」について

「知識人」という言葉が昔はあったように思う。死滅した言葉かと思っていれば、最近ノーベル賞を受賞したある小説家がテレビ番組でさかんに「知識人」という言葉を使っていた。「知識人」とは何か。甚だあいまいな言葉だ。私が自然科学系の研究所にいた頃、ある幹部が、「定義のはっきりしない、不明瞭な言葉で文章を書くのが事務屋だ。事務屋のような文章を書いてはいかん」といっているのを聞いた。メーカーでは便宜上従業員を事務屋、技術屋と分けることが多い。また、別の幹部から「知識とは真理を知ることという。真理は自然科学の世界だ。事務屋が知っているのは常識であって真理ではなく、従って知識ではない」という意味のことをよくいわれた。

そうすると、「知識人」とは、自然科学を学んだ人々を指すのだろうか。ところが、このいわゆる純文学の小説家をはじめ、好んで「知識人」という言葉を使う人々は、一部の「物書き」に多いようで、このような「物書き」に自然科学を学んだ人は少ないようだ。また「知識人」という言葉を盛んに使う人々は、私の目から見ると、世間の常識を欠いた発言をよくしている。実業界などで実務の体験をした人でもなさそうである。前述の研究所幹部のいった、「道楽遊び」の文学の勉強をし、それで衣食している人々が多い。

どうも「知識人」というのは「我々はお前達よりよく物を識っているぞ、お前達よりエライ人だぞ」といって、世間の人々を見下して説教をしたがる人々のようだ。といて、彼等が知っていることは、世間では何の役にも立たない浅薄なことや観念論ばかりのように思える。

昔のシナでは清国の滅びる直前の1904年まで1400年間にわたって科挙という、高級官吏の登用試験があった。針の穴からラクダを通すという形容詞を使いたくなるような難関だった。これに通ると、名誉と富と美女は欲

しいままだった。

男の子が生まれると、邸内に学問所を建て、専属の家庭教師を備って幼少の頃から猛勉強をさせる。試験のためには「四書」「五経」(論語、孟子、易経、書経、詩経、礼記、左伝)の43万字を丸暗記することが最低条件。一日に200字覚えたとしても6年間かかる。そうして、これの数倍もある注釈書を読んで、更に詩文を作る稽古をしなければならない。習字はもちろん必須。

五十歳で合格すれば若い方だといわれるくらいだった。

だから、科挙に合格した官吏のシナ古典(といっても儒学関連のもののみ)の知識はべら棒であった。ところが、これらの官吏が有能な行政官であったかという点、全く逆。

彼等は治山治水の土木のイロハも知らなければ、財政・産業の知識もない。精神活動は受験勉強ですり減らして中年になっているから、学ぶという気力はすっかり失っている。

彼等の頭の中には、行政官として必要な知識はゼロで、超難関の試験に通った、というプライドだけが詰まっていた。

物を識っていても、何にもならず、社会に害毒を流した好例が、科挙を経て役人になったシナの官僚群であった⁵⁾

江戸時代の本多利明は、社会に無用のシナ古典の知識人を、「片情張りて、即詩、即文などと手柄の様に覚え、衆人を見下し、高慢胸外に溢れ、衆人に忌嫌わる」は「浅はかなる次第」と説き、「イギリス国では、学校の導師等、諸生を教示するの趣意は、風流游芸を厳禁し、唯々国家に利益する真法・真理を教示する」と書き、イギリスのやり方を学べといている⁶⁾

同じ江戸時代の海保青陵も、無用の学問を批判している。

「学問といふは、古のことにくわしきばかりのことにはなきなり。今日

5) 「科挙」, 宮崎市定, 中公新書, 1990年

6) 「近世日本の学術」, 杉本勲, 法政大学出版局, 1982年, pp.241 ~246

唯今のことにくはしきがよき学問といふのなり。およそ、今の時にくらきはむだ学問といふものなり」

「国を富まさんと思はば、ねばりたる、ひつつきたる心を洗ひてしまひて(〇〇理論やイデオロギーやドクマの呪縛からのがれて)、ずっと目を天にあげて、高きところより、一目に下を見下すつもりで見ねば、抜目あるなり」

青陵が辟易して、どうにもならぬと、サジを投げたのは、書物を読む「知識人」だったようだ。

「もっとも情こわく、たたきても、へさえへも、ごくごくいかぬものは、書を読む人なり」⁷⁾

江戸の昔から、「知識人」というのは、世に役立たぬ存在にもかかわらず、衆を見下す言動を行ない、観念論を口にしていたようである。

第二次大戦後、日本を占領した占領軍の最高司令官はマッカーサーで、その時代に長らく首相の座にあったのは吉田茂である。両者は貴族趣味の点や、傲岸な性格の点で共通点が多く、いわゆるウマが合っていたようだ。

某日、日比谷のお堀端にある連合軍最高司令部（現在の第一生命ビルにあった）に出かけ、用談の済んだ吉田に、マッカーサーは次のような内容のことをいった。

「自分は青年士官の頃、日露戦争に観戦武官として従軍し、大山、兎玉、乃木をはじめ多くの将軍と会った。彼等はそれぞれ人物に風格があった。再び自分は40年ぶりに来日して日本の将軍の面々と会う機会ができた。

しかし、会って見て、これが明治の将軍達と同じ人種、同じ民族だとは思えなかった。一体これはどういうことか」

吉田はこの話を寓話として、当時の文教審議会の席上でしゃべった、とその時文教審議会のメンバーだった和辻哲郎が書いている⁸⁾。

7) 「江戸時代の先覚者たち」, 山本七平, PHP研究所, 1990年, pp.28~29

8) 「愚図のおおいそがし」, 山本夏彦, 文芸春秋社, 1993年, pp.115~119

明治の将軍達の学問は読み書き程度のものだ。共通しているのは、少しのシナ古典の知識であり、当時の必要性から、達意の書簡文が書けたくらいである。

昭和の将軍達は、幼年学校、士官学校、陸軍大学校で軍人としての一貫教育を受け、外国語や数学や理化学の知識をつめ込まれた優等生だ。陸軍大学校卒業後は例外なく先進国への留学や駐在武官を勤めて最新知識にふれ、帰国後は陸軍省や参謀本部の枢要なポストを順次そつなくこなして、陸軍の全体を見る大局観を養っている。ところがこれらの昭和の将軍達は、人物的にはもちろん、軍事科学の知識においても、戦争の指導力においても、信じられぬくらいダメだった。マッカーサーならずとも、たった40年間でこうも落ちるのかと思える程である。

その原因を考えることは大学人として大変重要だとは思いますがここでは言及しない。言及していると紙数が尽きてしまう。

ここでは、知識だけ持っていて、現実の世界では何の役に立たぬことの一例として提示しておきたい。

ある東洋思想家は人間の知的活動様式を「知識」「識見」「胆識」の三つに分けて説明している⁹⁾。

「知識」は人間知性の、頭の機械的な働きによっていくらでも得られるもの。本を読んだり、講義を聞いたりすれば、特別頭の悪い者でない限り、いくらでも知識は修得できる。これに対して、「識見」は価値判断力ないし、判別能力とでもいうべきもの。理想を持ち、現実のいろいろな矛盾・抵抗を体験し、物理的・心理的・社会的に貴重な体験を経て、いわゆる生きた学問により得られるものだ。

自分でよく考え、日常の行動基準にまで身につけ、実行を伴うようにまでなったものである。

さらに、「見識」が、現実のさまざまな矛盾や、悩みに屈することのない

9) 「朝の論語」, 安岡正篤, 明德出版社, 1980年, p.94

実行力、決断力を持つに到ると、「胆識」となる。

大学は「知識」を得る場であることはもちろんである。「胆識」は学生諸君が世に出てから、自ら志を持って修得すべき事柄であろう。ただ私の拙い経験から反省すれば、「見識」への努力を自らに課すことを学生時代の早いうちからやっておくべきだと思う。

明治の將軍達の学問の程度は読み書き程度であった。しかし、彼等は「侍の行動はどうあるべきか」「武士としてどう生きるべきか」を幼少の頃より常に厳しく考えさせられ、また考えてきた人々である。彼等の父親、祖父、そのまた曾祖父も同様で、「侍としての倫理観と行動」を世襲してきた。代々受け継がれ、自分達も磨きあげた「侍の美学」がマーカーサーという異国の青年士官にも自ずと「人物としての風格」と映ったのだろう。

「知識」はoff the job trainingで得られ、「胆識」はon the job trainingで身につけることが多い。「見識」はその双方により修養するものだろう。

自分の未熟さを棚に上げて、と笑われそうだが、「見識」「胆識」の必要性を学生諸君に訴えたいと思う。

「知識」は大変重要だが、それを血とし肉として応用し、活用できるものにしないと、世間から馬鹿にされているにも拘らず、高踏的姿勢で世間を低く見る「知識人」と同類になってしまう。

昭和の將軍達の頭の中には「知識」が一杯詰っていた。しかし、それは「死んだ知識」で、その言動は、自分の出世のことのみ考える、「侍の美学」から全く逆のものであった。軍人としてはもちろん、人間としても恥かしい行動を繰り返し、日本のみならず他国にも害を流した。

「学問への姿勢について」

本多光太郎先生と八木秀次先生は学者として超一流であると同時に行政

能力もあり、多くの俊英の学者も育てた。本多先生はK S鋼を発明し、第一回の文化勲章を受章している。八木先生は八木アンテナの発明者だ。後には東工大の学長をされた。

本多先生は世界に誇る金属材料研究所をほとんど自分の手一つで作りあげ、茅誠司（元東大総長）をはじめ多くの俊才を育てた。当時の帝国大学の教授は文部省へ行っても局長、課長としか会わないのが普通なのに、本多先生は下僚の事務官の所まで足を運び、諄諄と金属材料関連予算の必要性を説くので、事務官達は高名の学者の長時間の説明に恐縮するのが常だった。本多先生は巨額の研究資金を住友グループから得ていたが、大阪の住友本社へ行った折など住友の当主や重役の前で、卑屈な態度は毫も見せることはなかった。

服装をかまわず、三河弁まる出しの好々爺然とし、弟子に対し声を荒げることなど一度もなかったが、弟子達の研究姿勢や論文等に対しては厳しかった。東北帝大の総長を何期も務めた。総長として教育勅語を奉読する時平気でよく間違った。教育勅語の奉読を誤り、切腹して死んだ小学校校長のいた時代である。

数多くの研究業績をあげ、多額の研究資金を持つ本多教授に同僚教授連の嫉視が集まるのは自然のなりゆきだった。彼等の本多批判は次のようなものだった。

「学問とは、西洋のえらい学者の書いた本をできるだけ多く読んで理解することだ。西洋の学者の書いた本に記載されている実験を日本でもやってみて、実験結果を確かめること、これが学問である。しかるに、本多教授は西洋のえらい学者が書いていないことばかりをやっている。どんな結果が出るか分からぬような実験ばかりをやっている。右のものとも左のものとも分からぬ実験に汗水たらしている。本多教授のやり方は学問ではなく、土方仕事だ」¹⁰⁾

10) 「西沢潤一の独創開発論」, 西沢潤一, 工業調査会, 1986年, p.45

私の昔学んだ法学部では高名な教授が綺羅星の如くならんでおられた。今から思うと怠惰学生だった私などに勿体ない様な先生方だった。外国の専門誌に発表された新しい学説を日本で誰よりも早く紹介することが先生方の重要な仕事だったように思う。これらの先生方の多くは第一次大戦直後のドイツに留学されていた。当時のドイツのインフレは天文学的数字である上に、マルクに対する戦勝国の円の為替相場はきわめて高かった。

ドイツの学者達は生活苦のため多くの蔵書を手離し、これを先生方は日本の相場から見れば二束三文の価で買い切って日本の研究室へ送った。ドイツの学者が生涯をかけて営々として集めた書物を、その学者の書齋にあるもの全てをまとめて買った先生方もいた。その中にはマルクス自身の書き込みのあるマルクスの手沢本もあった。ベルリンやライプチヒといった学都の古書店の大お得意が日本からの留学生だった。先生方から当時の豪勢な留學生活をよくうかがった。青二才の留学生がドイツで一、二位を争う高名な学者を自分の下宿に呼んで個人教授を受けていた。タクシーの運転手が文字通り小躍りするようにして、「Danke Schön!」を連発する程のチップをはずんだ。先生方が当時の思い出を語られる時の表情を見て、ドイツ語の「Guten Alten Zeiten」という言葉を想った。

日本の法律体系はドイツやフランス式のいわゆる大陸法系である。法学部の先生方の重要なお仕事はこれらの大陸諸国の研究成果を調べられて日本に紹介し、法曹界のレベルアップに供されることだった。

当時、法学関連の学者になるには、少なくとも、ドイツ語、フランス語、ラテン語が読めなければダメという雰囲気だった。ドイツ語だけで音をあげていた私は早くからその道をあきらめた。法学部でも西洋の学問の紹介が大事な仕事だったから、語学はきわめて重要だった。

法学の世界でも西洋の学者の書物を読んで理解することが学問であり、学者になるには外国語が不可欠だった。

刑法学の泰斗の木村亀二先生は、中学時代から関心のある分野の原書を

丸善に注文購入して読んでおられたと、先生の口から直接うかがって、自分の中学時代のことを思うと、全く自信を失ってしまった。国際法の小田滋先生(現在国際司法裁判所判事で、ハーグ在住)は学生時代から毎週ドイツ人の先生宅に通って自分の草したドイツ文の添削指導を受けていたという。

採点が特別辛いという評判だった某先生の試験に、日本文で解答せず、ドイツ文で解答を試験場のその場で書いて提出し、満点に近い評価を得た、というのが先生のご自慢だった。

これらの先生方は研究活動や著作の執筆に没頭されている感じで、凡庸な学生向きの講義にはあまりご関心がなかったようにお見受けした。怠惰学生のひがみからか。

丸善に新刊書が入ると素早く自分で全部買って独占し、それから紹介の論文を誰よりも早く書く先生とか、自宅と丸善と本郷(大学所在地)を線で結んだ三角形より外に出たことがない、といった先生もいたらしい。後の先生についてはその先生のご長男から私が直接承ったことだから間違いあるまい。

八木秀次先生は東北大教授として八木アンテナを発明した。当時、守銭奴との評もあった某大資産家を説いて、多額の研究費を毎年得る手腕もあった。八木先生はその研究の目的や意義を素人に理解させることにきわめて巧みであった。八木先生はその後、新設の大阪大学の理学部創設に参画し、湯川秀樹博士らの俊英を育てた。後には東工大の学長となった。

本多先生に対すると同様、八木先生に対する同僚教授からの批判も多かったようである。八木秀次教授と抜山平一教授(電磁気関連では今も多くの人々が抜山教授のテキストのお世話になっている)の対立は、研究とは何か、学問とは何かを考える上で有益と思われるので両者の対立点を「電子立国日本を育てた男——八木秀次と独創者たち——, 松尾博志, 文芸春秋社」から抜粋してみたい¹¹⁾

11) 「電子立国日本を育てた男」, 松尾博志, 文芸春秋社, 1993年, p.86, p.107, p.139, pp.238~240, pp.242~244

八木「大学の意義は民間でできぬことをやることだ。目前の問題に役立つことだけやるのなら、そんなものは学問でも研究でもないよ。科学でも工業でも常に世界の第一線を目指していなければ、学問とはいえない。

一見、現在の工業技術に結びつかないように見えても、それは、やがて工業界を刺激し、やがては先駆的技術となって、産業の新分野を切り拓いていくようになる。」

拔山「なるほど、未開の荒野を切り開くことは大切だ。しかし、後から続く者のためにきちんとした学問体系を作っておくことも、これまた大事だ。大体、未知の分野を切り開くなどという研究自体が日本のように中途半端な学問や技術のレベルしか持たない国では生兵法で、大怪我のもとになる。今の日本で誰もが独創研究などといって奇抜な研究を目指すなど、バクチをやるようなものだ。」

八木「研究とは未開の領域に突き進むことであり、誰もが知らぬことをやるべきだ。他人が既に知っていることをやることは調査にすぎない。模倣と研究とは違う。西洋学問の輸入商になってはならない」

拔山「そんな不確かなことより、とにかく、スタンダードな技術を完全にマスターする方が先だ。そうでなければ、日本の科学技術も産業も効率が上がらない。日本人は欧米人のやった後を半歩遅れて付いていくのが効率的だ。」

著作とか実験とか論文の書き方についても八木と拔山は違っていった。

八木「研究者は本など書くな。書く暇があったら、実験しろ。計算する前に実験しろ。数学は現象を記述するための道具にすぎない。だから数学から現象を追っていくと、現象の本質を見失い、現象の内面的な考察ができなくなる。論文でも数式は最小限に留め、最後の証明のためだけに使え。数式を駆使するよう見えて、実は数式に振り回されている論文は書くな。」

拔山「実験より先に計算をしてみろ。計算できないようなものは工学にはならんぞ。数学で表されなければ、工学でない。現象を発見するだけなら、それは偶然の結果にすぎない。その現象を数式化して初めて工学にな

る。」

八木「実験で得た現象の生命は永遠だが、理論は全て寿命がある。50年前の理論が今日では役立たぬように、最新の量子力学といえども50年後にはどうなっているか分からない。自分はその理論を知っているからといって、『我は人に教え得べし』という態度をとる。それが日本の学者の欠点だ。」

八木は理論にまどわされることを戒め、実験を重視した。八木は英国留学時代の恩師フレミングの次のような言葉を忘れなかった。

「実験的に確かめた事実は、いつまでも残る。だが理論は生まれては消え、消えては生まれる。事実に寿命はないが、理論には必ず寿命がある」
八木の考えをよく表しているのに次のような言葉がある。

「理論は膏薬と同じで、どこにでもくっつく。だが実験は、常に真つ当な結果をもたらしているものだ。こんなはずがない、と考えるのは、人間の方が間違っているのだ」

「研究とは、問題を解くことよりも、むしろ問題を発見することなのだ」

「研究室は本を読むところではない。研究室で本を読んで、高価な実験設備を遊ばせているのは、馬鹿がすることだ。研究室では、少しの間でも実験して、実験の工夫をし、その現象について考えよ。」

八木はドイツ留学から帰国した時、恩師から次のように諭されている。

「八木君。キュリー夫人のような天才なら、世界のために貢献するような研究もやれるだろう。だが、我々は世界のためよりも、まず、日本のためになるようなことをやらなくっちゃいかんのだよ。そのためには、研究よりも、欧州の学問を取り入れることだ。世界のためになるような研究は、それから後のことだよ。」

八木や抜山の遺風を受け継いだ東北大学総長の西沢潤一は、若い教授時代、大手電気メーカーの社長から面と向って次のようにいわれた。

「日本人に独創的な研究なんてできるはずがないよ。日本人はアメリカの特許を使って、アメリカの後を追いかけて開発するんが一番効率がいいんだ。君の特許なんかいらねえ。」¹²⁾

西沢先生は、平山教授から、「午前中は学術雑誌を読め。午後は実験せよ。夜はデータ整理や書物を読んで勉強せよ」と指導された¹³⁾

午前中は図書館に通って、仙台にたった一冊しかきていなかった最新の米国の学術雑誌をせっせと書き写した。コピー機などという便利なものはなかった。

この平山教授の教えを、社会科学系の学生に翻訳するとどうなるだろうか。

「西沢語録」

東北大学の西沢潤一先生は学問上のことで歯に衣させぬ発言をされる。学問とは何か、大学とは何かを考えるのにヒントを与えてくれるので、私は「西沢潤一語録」というノートを作って、先生の随筆集などで読む時、はっとさせられる部分を抜き書きしている。その一部を使って少し考えてみたい。

「物性関係の第一人者と自他ともに許す某教授の講演で一時間のうちに『ベル研究所でこういうことをやっていたので自分もやってみた』という話が何度も出たし、IBM社へ行って研究題目を仕入れてくる等ということが半ば誇らしく話られる」¹⁴⁾

「たいていの場合、根拠にしているのは既成の概念、いわゆる大家の印刷物であるから始末に悪い」¹⁵⁾

米国での研究の紹介なら「米国研究項目輸入商」にすぎぬのではないか。日本の学界では欧米の大家の研究を紹介する人々が大部分で、その説を少し改良したり、深めたりする人が評価される。新しい学説を発表などした

12) 「電子立国日本を育てた男」, 前出, p.14

13) 「人類は滅亡に向かっている」, 西沢潤一, 潮出版社, 1993年, p.14

14) 「西沢潤一の独創開発論」, 前出, p.28

15) 「同上」, p.34

ら、たちまち足を引っ張られ、悪口をいわれる。西沢先生は助手時代、定説とは逆の説を学会発表したため集中的批判を浴び、恩師の渡辺寧先生から二年間論文発表を禁じられるという苦い経験があった。欧米で、西沢論文と同じような内容のものが続々と発表されるようになるまで、西沢先生は学界から無視され続けた。

日本では皆と違う意見をいうと、変り者と冷笑され、排斥される。これは、かなり大きな集団で生活した経験のある者なら、必ず体験したことと思う。これを農耕社会の特色から説明する人もいる。確かに農耕社会は、和を貴び、異質を排し、メンバー間の能力の差が明らさまになることを極度に嫌う嫉妬の社会でもある。西沢先生の考えが世界的に評価され始めると、今度は学界の嫉視が先生に集中した感があった。

西沢先生のいうように、学問とは独創でなければ意味はない。

明治以来、大学の目的は、(A)「欧米より文物を移入して我が国の文化を向上させる」ことを目的とする部分と、(B)、「(A)を脱皮し、研究と創造」を目的とする部分があった。問題は(B)が余りに冷遇されてきたことだろう。(A)は(A)なりの成果を出してきた。少なくとも、日本の工業化には大いに有益であった。

工業化には、黙々とある一定の目標に向かって地味な改善・改良を続ける人々が不可欠である。全世界に情報のアンテナを張っていて、新しい技術を知ると、直ちにこの技術を導入する姿勢がなくては工業は伸展しない。オレがオレがという態度で地味な改善、改良を嫌い、人と違うことばかりやろうとする者が多くなるとは工業は発展できない。

ただ、いわゆる大量生産方式の工業は順次発展途上国に移ってゆくだろうから、今後は独創思考のできる人材の要求が増えていくだろうことはもちろんである。

西沢先生の恩師、抜山平一教授の著書に次のようなことがあると、西沢先生はいっている。

「日本の有機化学者に泥炭の研究している人が多いので、どうして日本

にほとんどない泥炭をわざわざドイツから輸入してまで研究するのかときいたところ、『何ととっても、有機化学はドイツだ。そのドイツの有機化学者が今一番熱心に研究しているのが泥炭なのだ。だから我々日本の有機化学者も泥炭の研究をするのだ』¹⁶⁾ そして西沢先生は次のようにいう。

「研究とは誰もまだやったことがないことを調べるはずなのに、(日本の学者は) 外国人と同じ結果が出ないと安心できない」¹⁷⁾

西沢先生は現代の学生に歯に衣着せず叱る。それは、薄っぺらな皮相な研究方法でゴマかすやり方はダメ、という先生の熱い思いからだろう。

「研究室に配属された学生(の) …知識量は増しているが千切れ千切れの断片で、因果関係も正逆が不確かで、よく咀嚼されていないことがわかる。つまり、思考能力が低下している。きわめて権威主義が強く、定説に弱く、疑うことをしない。実測が一致しなければ『自然現象がおかしい』という考え方をする。いまや、教官の方にまでこのような傾向が浸透している」¹⁸⁾

「教科書を信じ込んでいるから、学問が人間の誤解と誤謬の歴史であるなどとは絶対に考えない。教科書に書いてないことに対しては処女のおそれをいただき、相違が出れば青くなって歩みを止めるか、データを捏造することになる。当然、創造などということは出にくくなっている」¹⁹⁾

「アメリカが認めて初めて認めるのである。この傾向が最近、特に若い人に強いのである。自分の頭で考える、判断する、ということができない。外国でいっていることなら喜んで従う。それでいて本人は自主的に研究しているつもりなのである。私のいうことを聞かないから勝手にやらせてみると、結局アメリカの真似をしてしまう。物真似するくらいなら、初めから研究をしなければいいのである」²⁰⁾

16) 「人類は滅亡に向かっている」, 西沢潤一, 潮出版社, 1993年, pp.42~43

17) 「西沢潤一の独創開発論」, 前出, p.147

18) 「人類は滅亡に向かっている」, 前出, p.116

19) 「同上」, p.156

20) 「『10年先を読む』発想法」, 西沢潤一, 講談社, 1985年, p.99

「自分の頭でものを考えろと口をすっぱくしていても、なかなか定着しない。独創力は若い人こそあるというが、どうも、最近の若い人たちは私よりずっと保守的である」²¹⁾

「こういう男に限って外国の文献を見て、その通りのことをやりたがる。この傾向が近年ますます強くなってきた」²²⁾

「どんな研究をすれば良いか、本には書いていない」²³⁾

私（谷光）の民間メーカーでの経験では、中学校から大学まで超一流といわれるコースを歩んできた人達のうち、一割から二割の人々に顕著に見られる傾向があった。彼等に共通の傾向は、受験勉強でエネルギーを消耗し尽しており、会社に入れば優雅に、ほどほどに、スマートに暮してゆこうという態度である。彼等は決して不確実なことにエネルギーを割こうとはしない。

分っていること、すぐできること、を要領よくまとめて提出する。上役が不機嫌になりそうなこと、怒りそうなことは決してやらない。彼等は一様に優雅な趣味を持ち、芸名的なものやペンネームを持っている者も多かった。趣味といっても、賭事や勝負事といった他人と競うものには手を染めない。

彼等が人格形成期の20歳までにやってきたこと、人生の重大事は、与えられた問題（それは正解が必ずある）をいかに要領よく、単時間で解くか、ということと、過去の事実や外国語の単語を覚えることだった。

会社へ入って、ある時間を経ると、当然のことながら、自分で問題を見つけなければならない。その問題には答があるかどうかわからない。従って、解けるかどうかわからない。解答が複数となる可能性もある。彼等が作り上げた思考パターンとはまるきり違う。解答を考えても、それを他人

21) 『『10年先を読む』発想法』, 前出, p.100

22) 「同上」, p.104

23) 「同上」, p.106

に説明し、理解させ、説得しなければならない。これにはエネルギーがいる。しかし、他人に理解させることは、考え様によっては楽である。理解させた上に、他人をして行動に移させること、これは至難の技だ。熱意とか人格とか信用がいる。人格とか信用は自分で築き上げねばならぬ。頭のいい彼等は、これに必要なエネルギー量がすぐにわかるから、そんな野暮なことには手を出さない。スマートに避ける。

仕事への溢れるばかりの熱意が感じられず、何事にも恬淡、第三者的、評論家的である。仕事とか研究は無我夢中でやっているうちに、今まで考えられなかったことがわかって成就するものだ。スケジュール表に従っていればできるものではない。

「研究室で測定をやらせると、ちゃんとした会社で作った測定器を買ってくれ、とってくる。手づくりの機械を使わせようとしても頑としてやらないのがある。会社製のものと較正こうせいもしないで使おうとする。大体較正するということが頭にない。試料が測定中に変化するかも知れないから、例えば電圧を増していった時に、どんなふうに性質が変化するかを知るために、電圧を下げながらもう一度測ってみよ、といってもやらない。それどころかレコーダーで一度にグラフに写してしまおうとする」²⁴⁾

「研究室でも企業の機械を使おうとする。つまり、そういうのを製造会社が売り出すまでやらない。(製造会社が売り出すということは)その時には研究はすでに三番煎じぐらいになっている。(その分野で初めて研究をやるうという頃には) 機械は売っていない。自分で作ることになる。あるいは先輩の作った機械を使うことによって先輩との心の結びつきが出てくる。機械の動作原理がよくわかる。欠点もわかるから、直していく。次にもっと優れた原理に基づく機械を自分で考え出すことになる」²⁵⁾

与えられた正解の必ずある問題を効率よく解くことばかり訓練されてき

24) 「人類は滅亡に向かっている」, 前出, p.143

25) 「同上」 p.144

た者にとって、まどろこしいことは苦手だ。最小の労力でやろうとする。そこらにある道具を使って要領よく、早く結果を出そうとする。いかにして労力をかけず、教科書に書いてある通りのデータを出そうとする。実験で出たデータが教科書のそれと異なると、実験のデータに手を加えることまでやる。マキを割ってかまどで飯を炊いたことがない。炭をおこしたことがない。遊び道具を自分で使ったことがない。

全部受け身、受け身で道具を与えられ、手とり足とりで教えられた連中だ。

彼らに共通しているのは受け身の姿勢である。学問や研究は効率だけでは考えられぬことや、自分の頭で考えることの大事さ、を指導するのが教官の役目。ただ、「馬を川に連れてゆくことはできても、水を飲むことはできぬ」の諺通り、本人に学ぶ気がなければどうしようもない。冷たいようでも突き離すしかあるまい。

人間が人間に伝えられるのは、ほんのわずかで、何事でも、自分が求めて自得する以外に極意に達する道はないのだが…。

「後輩の研究者にこういわれた。『大学には金がないのだから、会社の研究所にかなうわけないですよ』と。しかし、会社の研究所でやっていることを、改めてやる必要はない。会社の研究所はおろか、世界のどこでもやっていないことを研究すればよいのである。競争者がいないのだから、根気よく研究を展開していくことができる。測定器だって、新しい分野だから既製品があるはずがない。全部自分で作ってゆくのだ。IBMチューリヒ研究所のベドノルツ博士やミュラー博士が超電導やトンネル顕微鏡の研究をしていた研究室は、日本の大学の研究室よりはましたが、日本の企業の研究室ほど豊かではなかったと思う。この程度の研究環境があればノーベル賞がもらえるのである」²⁶⁾

26) 「人類は滅亡に向かっている」 pp.229 ~230

私（谷光）はリクルート活動で主要大学の工学部へは毎年出かけていたから、大学の研究室、実験室の大体の様子は知っている。

また、民間企業の中央研究所や半導体関連の研究所でいたこともあるから、企業の研究所のことも知っている。半導体関連の開発部門には巨額の資金を投資している。クリーン・ルームの建設や維持や開発機器に関しては、大学の研究予算ではとてもできぬレベルのものであることは確かだ。

しかし、これは開発すれば大きな利潤があることが明白で、競争他社も同じことをやっており、開発のスピードがこの産業界で生き延びる死命を制しており、月産何百万個という大量生産までの開発が不可欠だから、どうしてもこうならざるを得ないのである。開発スピードがべら棒に早く、このスピードが将来の死命を制するのだから、人海戦術とともに、金でできることなら、金惜しみはできない。自転車操業と同じで、足を止めれば倒れてしまう。大学の使命である「真理の探究」とは違うのだ。

大学の存在価値は、「真理の探求」と、学生に「真理の深究」への基本態度と手がかりを教えることにある。企業と比べて研究資金の少なさを嘆くことは、大学の存在価値の何かを知らず、自分の無能を告白するようなものだ。金がない、時間がない、という人々に共通していることは、できない理由ばかりをいつも考えていることだ。

「カネと研究ということでこんな例がある。ある結晶を作る過程の中間生成物をうちの研究室（西沢研究室）は10種類発見したが、ケタ違いに高価な測定器を使っている米国のRCAやIBMのワトソン研究所は数種類しか発覚できなかった。こういう経験が私の研究生活で二、三回ある」²⁷⁾

「むずかしいことを知っていて、うまくいったということはあまりない。むしろ、ごく基礎的なことから出てくることが多い。よく物を知っていること、つまり知識の量を自慢する人がいるが、これは大したことはない。単純な基本でいい。上等のことなど、知らなくてよい。基本的なことをよ

27) 「人のやらない分野に潜む大きな種」, 西沢潤一, 日本経済新聞, 1994年12月19日

く理解することだ。知識は本を見ればいくらでも載っている。理解は自分の頭にしかないのである。」²⁸⁾

私(谷光)はメーカー時代、広報関係の仕事をやリ、新聞発表は何度となくやった。その時の体験なのだが、素人の新聞記者の質問に、短く核心を衝いてわかりやすく説明する研究者と、専門用語を使って長々と、さっぱり分からぬ説明する者がいた。説明を聞いて分からないのは自分の頭が悪いのではなく、説明する方の頭が悪いのか、核心をよく理解できずに説明しているか、のどちらかである。専門用語を連発したり、横文字を盛んに使用する人には、眉につばをつけて聞け。

「研究開発という仕事は個人依存性がきわめて強い。従って、船頭が多すぎてはうまくゆかない。集団研究をやったらうまくいくのではないかという意見があるが私は疑問視している。うまくいった例を私は知らないのである。」²⁹⁾

「どんな研究をすればよいのか。本には書いていない」³⁰⁾

①新しい発見を行ない、これに基づいて、②これが応用できることが確実となり、③これの製品化のため、迅速に開発しなければならなくなったとする。

集団研究は③の場合には有効で、この時は集団研究方式をとらなければ駄目だ。この段階では、ほぼルールが敷かれているのだから、人数とカネを注げばスピードアップ化ができる。①の場合は、個性の強い個人から生れる。考え方や理想ややり方の異なる人々が集まってできるものではない。その点で、①は大学に最も適している分野といえよう。

普通、①を基礎研究、②を応用研究、③を開発研究といっている。

28) 『『10年先を読む』発想法』, 前出, p.19

29) 「同上」 p.94

30) 「同上」 p.106

「後追いほどおカネがいる。最初に仕事をすればやったことは全て論文になる。二番目にやった人は最初の書いた人の分を削らなければならないので無駄が多くなる。その点からも最初に仕事をしなければ駄目だ。」³¹⁾

ニッチ（すき間）産業というのがある。大手がどこもやっていないことをやって、より少ない労力でより多い利潤を得ようというものだ。大手と競争をやるには、大手以上に金と人をかけて、性能の高い製品か、同質でより安い製品を作らなければならない。それはまず無理な相談というものである。大手がやっていないことをやり、大きな利益をあげているところは、どの産業にも多い。

しかし、企業では大きな市場、利益のあがる市場以外には手を出せない。利益をあげて社員の雇傭を守り、株主に配当し、国や地方に税金を納めなければ存在価値がなくなってしまうからである。大学（特に国立は）は違う。競争者が多い分野（流行の分野）や、東京にいた方が有利な分野や、京都でないとどうも弱い、といった分野などやる必要がない。自分だけしかやっていない分野を時間をかけてやっていけば何かは必ずできる。こう私（谷光）は思っているのだが…。

「自然科学」と「社会科学」について

メーカーに入社すると、現場従業員以外は「事務屋」「技術屋」に区別される。もともと、「技術者」の比重が高いのがメーカーだが、その中でも「技術屋」が中心の研究所で私は比較的長期間仕事をした。

その研究所の副所長のKさん（後に常務になった）は電磁気学の権威との評が高く、また奇人としても有名だった。私はよく知らないが、洗面の後には、タオルを使用せず、身につけている汚れたネクタイで顔をふく、とか、靴下をはかずに靴をはいている、とか、ワイシャツの裾をいつもズボ

31) 「人のやらない分野に潜む大きな種」, 前出

ンからはみ出している、と評判されていた。

仕事の必要性からこの副所長と接触することが多かった。私はこの人は、「物事の本質を突きつめて考える人だな」と感じる事が多かった。

Kさんは、部下の論文などを読む時、「事務屋のような文章を書くな」と、しばしば叱っていることに気付いた。

研究所で、「事務屋の存在価値」を考えさせられることの多かった私は、私なりに、「事務屋」と「技術屋」の違いは何かと考えざるを得なかった。

Kさんのいっているのは、「無内容の事項を情緒的な形容詞や副詞で飾りたてて、一見すると内容のありそうなものに仕立て上げるな」ということだと解釈した。

「デジタル化や数式化を中心にして、あいまいさを極力排せよ」と同じ意味だろう。

自然科学は、「仮説、実験、検証というサイクルで理論化を進めてゆく学問である」ともいえる。「主体としての人間行動の要素を極力排除した、あるいは排除できる学問」ということもできるかも知れない。客体としての人間は自然科学である医学の対象だ。

実験を通して検証されたものは理論化され、「真理」となる。私の学んだ学校では、「真理の追求が学徒の責務であり誇りである」と校歌に唱われていた。

この自然科学の「理論」は、(多くの前提条件の下ではあるが)、古今東西を問わず、普遍性を持っている。シリコン内の電子の振舞は、米国でも日本でも全く同じだ。

事務屋が学ぶ「社会科学」はどうか。

人間の行動は複雑で単純に割り切ることができない。好き嫌いがある。好みがある。ねたみや嫉妬心がある。同じ内容であっても、「あの人の言うことなら無条件に賛成する」「あの人のやることなら、どんな事でも反対だ」ということもある。人は欲得抜きに行動をすることがしばしばある。

人間集団には、伝統、おきて、習慣、風俗、歴史、文化等があり、濃淡

の差こそあれ、宗教の影響もある。

社会科学の分野では実験ができない。少なくとも実験室でやるような軽い実験は不可能だ。社会主義の実験は何十年もかかり、莫大な犠牲を出して、その実験を終ろうとしている。

実験ができないとすれば、社会科学の分野では、仮説があるだけといわざるを得ない。

仮説による将来予測は、「当るも八卦、あたらずも八卦」だ。経済学者の経済予測が当たったというのを聞いたことがない。経営学者が経営に手を出すと、例外なく失敗している。

真理の探求の道筋を通して得られた自然科学の理論は誰も反対できない。社会的にも有益であることは否定できない。

社会科学はあくまで仮説である。この仮説を真理だと誤解すると、イデオロギーやドグマとなって、社会に害毒を流すことすらある。

私の体験では自然科学を学んだ人（特に理論の要素の強い理学部の物理出身者など）は、往々にして、社会科学の仮説を自然科学の理論や真理と同じようなものだと誤解して、これに100パーセントの信頼を置くような言動をとる人と、社会科学を単なる「通俗な常識」にすぎぬ、と頭から軽視する人との極端に分かれがちだったように思う。前者の人々は、いわゆるマルキシズムを世界の古今東西を問わぬ普遍的真理だと思い込んだようだし、マグレガーが管理思想の分野で「Y理論」という仮説を発表し、日本語訳が出ると、この「Y理論」が真理だ、というような発言をする。

後者の人々は、「技術屋」は少し経験を積み、勉強すれば「事務屋」の仕事はできるが、「事務屋」は「技術屋」の仕事はできない、と一刀両断する。もっとも、この後者の人の意見は首肯すべき点が少なくなかった。

「科学とは自然科学をいうのであって、社会科学は常識に毛が生えたもの、人文科学は遊びだ」といわれて面白くないが認めざるを得なかったこともある。

「(社会科学の)理論というものは、いかなる理論であっても、非常に単

純な、小さな思い込みから発している。そしてその思い込みを、今度は言葉の武器をもって飾り立て、築き上げていく。経済の前途、世界の行く末など誰にもわからないのである。皆思い込みから出発するのである。…ある人がわかっているように見えるのは、その人がわかっているふりをしているだけなのだ」³²⁾

メーカーにいと好・不況の差を甚だ直截的に知らされる。好況だと、工場は仕掛品や材料で工場内が埋り、深夜まで煌々と電燈がともし、人々が働いている。不況になると工場内は閑散となり、午後5時を過ぎると森閑として人影がなくなる。昇給やボーナスは減り、人員整理のうわさが人々の心を暗くする。

だから、必死になって景気の動向を読もうとする。けれども、私の30年の経験に照らすと、大きな経済変動（昭和40年の不況、第一次石油ショックの不況、バブル景気とその変動など）の節目で、正確な予想をした人は、学者、評論家を含め、誰もいなかった。比較的正確且つ大胆に予想し、処方策を示したのは故高橋亀吉氏や長谷川慶太郎氏だったと思う。両者ともいわゆる在野の人だ。アカデミーの世界の人ではない。

では社会科学は不要なのか。私の答えは次の通りだ。

「もちろん必要だし、（使われ様によっては）大変有益になり得る。但し、自然科学ほど人的資源や金を注ぎ込む必要はない」

有益という根拠は何か。

人間の言行が歴史に文字として残されるようになって以来五千年間、人間の身体的、精神的本性は全く変わっておらず、将来も変わらないだろう、というのがその根拠だ。ICの性能がこの15年間で千倍になったように、人間の身長や体重や記憶力が百倍、千倍になることはない。ICの良品率（歩留り）が一ケタ上がるように、人間の醜悪部分の嫉妬心が一ケタ少なくなることはあるまい。物欲や権勢欲や名誉欲が無視できる程小さくなることは考えられない。

32) 「繁栄の法則」長谷川慶太郎，谷沢永一，PHP研究所，1994年 p.197

五千年間繰り返してきた人間行動の基本は今後も変わるまい。とすると、人間の過去の言動を詳しく分析すれば、種々の条件下で大体七、八割（こういう決め方が自然科学をやった者から笑われることなのだが、それは仕方がない）の正しい確率で人間行動が予測し得るのではあるまいか。

歴史、文化、伝統、風土、宗教、といった条件を考慮しなければならないのはもちろんだ。

「ミネルバの梟^{ふくろう}は夕暮れに啼く」という言葉がある。夕暮れになって、その日あったことについて理屈をつけるのが学者だ、という意味らしい³³⁾すんだ、どうでもよい、だれでもできる過去のことをあれこれ理屈づけはするが、現在や将来のことは何も分かっていない、という意味を含んでいる。

しかし、過去の事実をできる限り正確に整理することは、現在の人にとっても、将来の人にとっても有益だ。学問とは学問のためにやるもので、役に立つとか立たないかなどということは問題ではない、という考えもあるが経済学部で学ぶ者にとっては一寸首肯できない、という前提で話を進める。

過去の事実は膨大だから、全部集めることは不可能だ。(A)一定の取捨選択眼で収集し、これをやはり(B)一定の思考で分析して整理する。

(A)と(B)の前提を明示した上でのデータ表は実業界の人にとっても有難い資料だ。

その意味で統計学というのは地味だが大変有益な学問だと思う。

大蔵省や日銀や通産省などの各種統計は実業界でも想像以上によく活用されている。これらの資料を、特定の考え(論文を書くためとか何とかで)で、都合のいい部分だけ採り出して、外国の学者の説の日本版を作ったり、ある特定のイデオロギーの補強のために使っているような学者の、いわゆる理論などは実業界では一瞥も与えられていないのが実情だ。

ただ、このような資料をどう解釈し、どう分析するか、に関して多くの

33) 「繁栄の法則」, 前出, p.200

学者が行った方法や、その結果を学ぶことは大切だと思う。

大学の存在価値の一つは、学生が資料の入手、活用の仕方を学ぶ場であるからだ。しかし、実際の各自の判断は、大学を卒業した後、「ありのままの事実」を見るよう努め、それまでに磨いてきた自分の体験からの判断力に頼るしかない。

産業や企業の生成、発展、衰乏という過去の事実の収集、整理、分析、も前述の経済統計類と同様に、現在の産業や企業の実情を知るのに欠かせない。

過去の歴史は現在の自分を映す鏡だと古人はいつている。ただ、過去がこうだから、将来はこうだ、と断言できぬ所が社会科学の限界。恐らくこうなるだろう、という考えを、提供するのに役立つにすぎない。

『『事実』とそれについての『解釈』、そうしてもう一つは『事実』の『分析』です。

つまり、その『事実』の背後にどのような『メカニズム』が隠されてあるのか… (が大切)³⁴⁾という長谷川慶太郎氏の言葉は興味深い。

「ミスター参考文献」

「学者が『マルクスはこう言いました』とか、『ケインズはこう言いました』というのはおかしいのであって、そういうのならば、いう人はミスター参考文献か、ミスター索引といわれるべきである。ところが面白いのは、現在日本で活躍している大商人たちである。この人たちは、常に『私はこう思い、こう実行します。マルクスもケインズも、西欧の大経営学者も言っておりません』。こういう態度である」³⁵⁾

学者がマルクスやケインズの考えを紹介することはおかしいことではな

34) 「繁栄の法則」, 前出, p.180

35) 「日本の商人」, イザヤ・ベンダサン, 文芸春秋社, 1975年, pp.76~77

い。世間の99.9…パーセントの人々はマルクスやケインズのむずかしい本など読みはしない。経済学部 of 学生もその著作の一部を読むくらいだろう。だから、学者がマルクスやケインズをかみくだいて紹介することは、学者の仕事の一つであり、何もおかしいことはない。マルクスやケインズが社会現象をどのように分析したか、を知ることは、社会科学を勉強しようとしている者にとって有益である。問題なのは、マルクスやケインズの仮説を真理として紹介したり、自分の考えの補強材料として利用する態度だ。

社会科学の学説はいずれも仮説で、自分に具合の悪い前提や、考え及ばなかった前提を抜いて、あるいは無視して、都合のよい部分だけを前提にして作りあげられている。

30年も前の学生時代、「景気の悪い時は赤字国債をどんどん出して公共事業を行って景気を刺激し、好況時には増税を行って、景気の過熱を冷やし、国債を償還する」というケインズの説を聞いて感心した。

しかし、世間に出てこれは観念の世界の話である、と気付くようになった。

現実には増税は誰も反対だ。選挙が恐しくて、大衆に迎合しなければ椅子を失う議員さん達は増税絶対反対を叫ぶ。ごく最近のいわゆるバブル景気の時ですら、増税して赤字国債を減らす、という話は（私の知る範囲では）全くなかった。この仮説が成立できるのは、「好況時に増税」ができれば、という都合のいい前提の上に立っている。

借金による対処は麻薬のようなものだ。過去の歴史がよく示している。江戸時代の各藩で、大阪や京都の商人からの借金で切り抜けようとした藩は例外なく借金がふくらみ、藩全体の年間収入全部をはたいても、借金の利息も払えないような状態になるまで、ずるずると進んで、遂には踏み倒す、というパターンを取っている。江戸時代の人も、現在の人と同じ人だ。

現代の人は昔の人より物欲、自己顕示欲、金銭欲に乏しいといえるだろうか。

再び私の学生時代にもどると、当時は(今もそうかも知れない)、何事も

西欧や北米が進んでいて、西欧や北米と比べて違っている事があれば、それは日本の後進性の現れであり、先進国のようになっていかねばならない、という価値観を押しつける学者が多かった。日本企業の終身雇傭制、年功序列制、企業別労働組合制、といったものはいずれも日本の後進性の表われとして一刀両断されていた。しかし、企業の中で仕事を始めてみると、それは日本の社会や、日本での競争下で、先人達が苦心惨嘆して育て上げてきたものであることを知った。書物の観念の中からでなく、文字通り、汗と脂と血の模索の中から生まれてきたものであることを知った。時代の文化、習慣、風土、といったものの中からできたものであり、ある価値観から、遅れているとか、間違っている、とか軽々に、評論家的態度で断を下せないものと知った。もちろん、それを作った前提条件が変れば当然それらも変ってゆくだろう。

その意味で、日本の大商人達（大企業の幹部）が外国の経営学者の仮説などに左右されないのはあたり前のことだ。中小企業のオーナーの二世がアメリカあたりのビジネス・スクールに学んでアメリカ式経営を導入した所は例外なくつぶれている。

「価値観」という色眼鏡で見ると、事実が見えなくなる。ある高名なマルクス経済学者が「世界中でソ連が最も自由で最も豊かで、最も文化・科学・工業水準が高い」と公言し、遂には「チョコレートもソ連のが最も高品質で他国のものとは比べようがない」といって世間の物笑いの種となったことがある。

確かに、ある時代にはこの学者のいうことを信じる人も少なくなかった。しかし世間の人々は馬鹿ではない。

「文献氏、索引氏が学者面をしているのは、世界中どこもだ。九割がそうだ。日本だけでない。ただちがうのは、一割の独創的学者が欧米では尊敬され、日本では異端視されることだ。日本の場合には、独創的学者が仲間から評価されない。日本では独創は悪で、修正は善なのである。大筋に

関係のない細かいところをちょっといじって、ひねった研究というのが非常に高く評価される」³⁶⁾

欧州やアメリカでは、人と同じことをいっても誰も関心を示さない。日本では人と違う意見を言うに変な顔をされ、変り者、天邪鬼、変屈者視され、瓜弾きされる。

絵画の世界でもそのようだ。私は日本人の油絵で世界に通用するのは藤田嗣治だけだと思っている。個人的には佐伯祐三や金山平三が好きではあるが、世界に通用するとなるとやはり藤田と考えざるを得ない。

藤田はフランス画壇で注目されるために、フランス（あるいは欧州の）画家の描き方と全て逆のやり方で描こうと考えた。フランス人画家は色を多用するので藤田は白と黒だけでやろうと考えた。当時はやりの印象派風の絵は筆のタッチを多用していたので、藤田は筆のタッチは残さず日本画風のボカシを使った。また藤田は手先の不器用なフランス画家が絶対にできない、日本画の面相筆による線を使った。西洋画は物体を面でとらえる。藤田は油絵の世界では従来考えられなかった、面相筆の線で人や物を描き物体を面で描くのでなく線で描いた。面相筆で線を描けるように血のにじむような練習をした。白と黒だけの画面でボカシで陰影を作り、面相筆による線が描けるような特殊なキャンバス作りに心血を注いだ。フランス画壇は従来の欧州の画風と全く異種のものが現われたので藤田の絵に注目が集った。しかし、日本画壇は藤田を無視し続け、フランス印象派の亜流みたいな絵ばかりを描いた。

私が欧米の学者の新設を紹介するだけの学者に疑問を持ち始め、独創性の重要さを感じ始めたのはメーカー在職時代半導体の研究所に配属になってからである。半導体の世界では特許問題が大変厳しい世界だ。向うの学者や技師が考え出したことの紹介などあまり役に立たない。向うのと違う、

36) 「山本七平の知恵」, 谷沢永一, PHP研究所, 1993年, pp.126 ~127

より高性能のものを考えださねばならない。向うよりも一歩進んだ効率のよい生産方式を採り入れなければならない。

当時は日本の半導体の水準も世界水準になっていて、お手本に頼ることができなくなっていたのである。